所報

美　濃　市　教　育　研　究　所
第３１６号平成２５年８月２１日発行
電　話（０５７５）３５－２３３４
ＦＡＸ（０５７５）３５－３１３４
e-mail：kyouikuken@city.mino.lg.jp

夏期研修で教師力も向上！！

今年度の夏期研修は、９講座を実施し、１１５名ほどの先生方が参加されました。どの講座も先生方の意欲的な姿があり、大変有意義な研修をして頂いています。

また、昨年から始めている美濃市・関市との合同講座は、計８講座に美濃市から６名、関市から３９名の参加者があり、昨年度より大幅に参加者が増えました。

美濃市の伝統文化「紙漉き」研修　７月２６日（金）

美濃学研修の一つ、美濃市の伝統文化「紙漉き」研修会に９名の先生が参加され、美濃和紙について体験と実地研修をされました。

最初に、美濃和紙の里会館で、船戸館長さんから、美濃和紙について映像や館内での説明を受けたあと、１階の紙漉実習室で、一人一人の先生方が、実際に紙漉を体験されました。その後、御手洗にある丸重製紙さんの工場へおじゃまし、辻専務から「機械漉き和紙」の行程を丁寧に説明していただきました。さらに、蕨生地区へ移動し、「手漉き和紙」の市原達雄さんの工房・「本美濃紙」の澤村正さんの工房を見学し、説明を受けたり、作業体験をさせていただきました

（受講者から）

・これまで和紙の里会館の展示見学や、紙漉き体験、和紙工房、和紙工場の見学に、生徒を引率して訪れたことが何度かありました。しかし、自身がそれを体験したり、お話を伺ったりするのは初めてで、そういう立場になってみて、改めて伝統ある本美濃紙の素晴らしさや伝統の技の見事さに感動しました。言うまでもないことですが、自分自身が体験、感動しなければ生徒にそれを伝えることはできません。とても意義深い研修でした。

・こうぞの繊維をうまくからませて和紙が作られていることがよく分かりました。機械漉きでも、手漉きの行程をしっかりと取り入れて行われていることに驚きました。手漉きの伝統はとてもすばらしいものだと思いました。

・澤村さんの手漉きを見学して、何も力が入らないような自然な動きであのなめらかな紙ができあがっていくのに驚きました。伝統の技術なのですね。「道具を作る職人さんが今後いなくなるかもしれない」とのお話は心配ですが、市原さんにも澤村さんにも若い後継者がいるとのことで技術や伝統が引き継がれて行くだろうことがうれしかったです。

今、求められる「校内研修」とは

鳴戸教育大教授　村川　雅弘

１，伝達・習得型の研修は効率化を

研修課題は数あるが、軽重をつけたい。たとえば、新しい知識や情報を伝達するための研修は資料を配付するなどの工夫をして、短時間で済ませたい。服務研修に関することを全て明文化したりして配付し各自で読むことで研修に代えた学校もある。

新しい技能を取得する研修で有効なのは、「教え合い研修」である。たとえば新規に購入した機器やソフトの使い方を習得する際に、そのことに関心のある者やその分野に比較的明るい者が、自力あるいは業者の説明をうけて特に興味のある技術を習得する。そして、校内研修の中で教え合うのである。実際に子どもに配付する資料や授業で使う教材を作成すると、さらに研修意欲が高まる。

２，子どもの育成に直結する研修を

都市部を中心に若い教師が増え、授業力育成が課題となっている。自己の研修には二の足を踏んでも、「理解できていない子どもを残して教えたい」「生徒指導の方が気になる」「部活で生徒をみてやりたい」等の思いから、子どもに直接かかわる事柄には意欲が高まるのが教師である。そこで、若い教師が多い学校では次のような研修が効果を発揮している。

すなわち、ベテランや中堅が若手とチームを組んで、子どものための「学習ガイド（各教科の学習方法やきまり、家庭学習の仕方など）」を作成するのである。協議を進めながら具体的な手だてを明文化していく過程で若い教師が学んでいく、まさにＯＪＴ研修である。教科学習と総合的な学習の両方において、若い教師の授業力が一定レベルで担保できる。

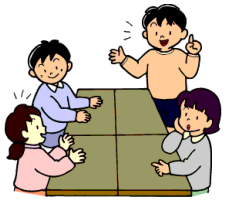
３，一人一研究の成果発信と共有化

行政研修でも校内研修でも、最終的に個人研修につながらなければ、個々の教師の力量向上にはならない。一人ひとりが研修に当事者意識を持つことが大切である。

学校としての研究の方向性や中心にする教科等を決めて一丸となって取り組むことも、学校がある限られた期間内に変容していくうえで大切であるが、一人ひとりが興味ある教科等や課題に関する研修テーマを設定し、個人研修を積み重ね、その成果発信の場として、校内研修を位置づけることもできる。その際、発信者がその日の研修のコーディネーターとなる。

４，校内研修を個人研修につなげる

校内研修の最後に少し時間をとって、今日の研修を通じての学びや新たな課題を記録に残す時間を設けたい。たとえば、付箋に書いて個人研修ファイルに貼っておき、少し時間が確保できたときに各自で分類・整理するのである。



研修による学びが文字として形になれば、満足感を得やすい。自己課題が明確になれば研修への関心・意欲が高まりやすい。研修で課題が解決できたならば達成感を持ちやすい。学習場面において子ども達による学習の振り返りが重視されているが、同じことが教員研修にも求められている。

５，研修の成果の「見える化」を

研修意欲を引き出すのは「手応え」である。たとえば、教科を超えて言語活動の充実をテーマに取り組んだある中学校では、授業における生徒の変容が研修へのさらなる意欲づけとなった。近年では全国学力調査結果の伸びが明確なエビデンス（証拠）となることが多い。

研究開発校等の運営指導委員を拝命した際には、研究組織の中に「評価チーム」をつくり、計画的・継続的に機能することを提案する。学校が特に力を入れて取り組んでいる研修課題については、その効果を探るための評価・測定の方法を工夫したい。取り組みの形成的な評価・改善のためでもあり、教職員の取り組みへの意欲の喚起にもつながる。

２学期以降、校内研修の活性化に向け、研究主任を中心にしてレベルを上げていきたいものです。また、個人として夏期研修や実践記録など各自の課題を明確にして、２学期のスタートを切りたいものです。

講座６　小学校器楽の基礎　　７／２９（月）

夏期研修講座から

講師　研究所指導員　溝下美奈子先生（美濃小学校教諭）
会場　美濃小学校　音楽室　・参加者　５名

・　小学校で扱う楽器の指導法についてポイントを押さえて、指導をいただきました。特にアコーデオン、木琴については、全員でパート演奏できるまでになりました。

（受講者から）

・アコーデオンについて、知らないことが多かったので、実際教えてもらって実技してみて、子どもたちのつまずきがわかりました。そのときの支援の仕方も教えて頂いたのでよかったです。

・打楽器については、正しい扱い方を知らないと、学校にあっても子どもたちにさわらせることが、少なくなったり機会を作らなかったりしているのでよい学習になりました。

・普段あまりさわることのない楽器などで、いざ音楽会などで演奏しようと思うと、あいまいなままの演奏の方法ですることが多かったので、今日楽器についてお話を聞けてとても勉強になりました。

講座９　小学校英語活動健　７／３０（火）

講師　岐阜立厚見中学校　樋田　光代　教諭
会場　美濃中央公民館　３階展示室
参加者　１８名（関市６名）

・今年度も、厚見中学校の樋田先生にきていただき、小学校の英語活動や中学校との関連などを分かりやすくご指導していただきました。

（受講者から）

・２学期以降の授業に取り入れたくなるような楽しいゲーム活動を具体的に学ぶことができました。さらにその活動中にコミュニケーション力を付けるのに有効な「ふあふあ言葉」について詳しく教えて頂き、とてもうれしく思いました。

・決まった言い方をするだけでなく「Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ」「Ｔｏｏ　ｌａｔｅ」など、ちょっとしたひと言を付け加えるだけでとても円滑に活動が進むし、人間関係もよくなりそうで、是非、取り入れていきたいと思いました。

・楽しみながら確実に英語を身につける方法を教えていただき、大変参考になりました。特に私は中学校のＢａｓｉｃコースを担当しているので、英語に苦手意識のある子、嫌いな子に、いかに定着させていくかは課題なので、この講座を参考にアレンジして中学校でも使えるように工夫したいと思いました。今日は本当に楽しくためになる研修会をありがとうございました。

講座１２　教育実践講座・学校所員会　７／３１（水）

講師　安田　正治　美濃中学校　教諭
会場　教育委員会　会議室　・参加者　８名

・第２回目の教育実践講座では、美濃中の安田先生が、３年前に取り組まれた実践記録の良さと課題を交流する中で、実践記録の書き方のポイント、夏休みや２学期等に取り組むべきことについて大変分かりやすくし指導して頂きました。
　また、その後の受講者の取り組みの交流会では、今までの実践を踏まえながら適切なアドバイスをしていただき、受講者が今後取り組むべき内容を明確にしていただきました。

（受講者から）
・実践記録を書くにあたっては、学習指導要領に立ち返って付ける力を明確にすること。子どもの姿や思考の変容をデータ化すること。個に応じた指導はどうあるべきか。抽出児を通して検証することが大切であること等を学ばせていただきました。
・今日は、安田先生の実践記録をみせていただき実践記録の書き方だけでなく、授業づくりのポイントを学ぶことができました。子どもの実態から付けたい力を明確にして、そこから単位時間の流れや役割を決めて単元構成することがすごく大切だと感じました

◎講座１４　美濃市の自然･天王山　８／６は　大雨洪水警報のため惜しくも中止となりました。
◎８月２８日（水）の教育講演会にて研究所嘱託所員が下記のテーマで発表します。
「ＱＵを生かした　いごこちのよい学級集団をつくるために」

雑感　　～　私の夏休み日記　　本堂でフラメンコ聴く夏期講座　～

夏休みに入った７月末、美濃加茂市の伊深の正眼寺というお寺で２日間にわたり夏期講座が開催された。友人が誘ってくれたので初めて参加した。駐車場に車を止め、杉木立の参道を会場へ急ぐ。すでに多くの参加者が本堂を埋め尽くしていた。友人と一緒に畳の上に座り開会を待つ。周りは、年配の人ばかりでなく、リュックを抱えた若者や女性も多い。ざっと２００人程の人であった。

最初に正眼寺の住職の山川宗玄老師が立たれ。５９回目となる夏期講座の由来や今回のテーマ「生きる」などの法話をされた。お若いと思って資料をみたら、何と私と同年だった。そしてスイス管弦楽アンサンブル演奏。質素な昼食。警策（きょうさく）で肩を叩かれた座禅体験。

その後、何とアントニオ古賀さんが本堂前に現れた。「１・２・３・ダー」といって笑わせ、「あのアントニオではありません。歌手のアントニオです」と紹介されながら、ギター１本で、フラメンコから懐かしい唱歌、そして、古賀メロデーを休む間もなく歌い、弾き、語り、本堂の２００人の人たちもパートに分けられ一緒に大合唱となった。７２才とか。何と元気な方だと思った。さすがプロと思った。話の中で自分の生い立ち、ギターの魅力、人生はハーモニーなど心にしみる話をされた。翌日は、座禅や芥川賞作家で福島三春町の玄侑宗久住職の講演を聴くことができ、大変感動した２日間であった。

あれから１ヶ月程経った。今何が私の中に残っているか。あの時の話はすでに忘れてしまい、物産展で買った三春町の地酒はすでに無く、抽選であたった団扇だけが残っている。老師直筆の「雲　悠々」。これが私のこれからの生き方と納得している。